

# 演奏会

## 第9回安川加壽子記念コンクール

# 優勝者演奏会

第1位・安川加壽子音楽賞・山中賞受賞

---

## 重森光太郎



### プロフィール

---

2000年生まれ。6歳からピアノを始める。2017年 第1回 Shigeru Kawai 国際ピアノコンクール ファイナリスト 奨励賞。2018年第18回ショパン国際ピアノコンクール in Asia プロフェッショナル部門 銀賞。第9回桐朋ピアノコンペティション 第1位。2019年 第9回安川加壽子記念コンクール第1位及び安川加壽子音楽賞、山中賞。その他多数。高校卒業演奏会、桐朋ガラコンサート、銀座音大フェスティバルなどに出演。これまでに高務智子、辻井雅子の各氏に師事。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部キャンパス特待生として入学し現在2年在学中。三上桂子氏に師事。

《プログラム》

J. ブラームス：創作主題による変奏曲 ニ長調 Op.21-1  
*J. Brahms : Variationen über ein eigenes Thema D-dur Op.21-1*

F.F. ショパン：即興曲第3番 変ト長調 Op.51  
*F.F. Chopin : Impromptu No.3 Ges-dur Op.51*

F.F. ショパン：幻想ポロネーズ 変イ長調 Op.61  
*F.F. Chopin : Polonaise-fantasia As-dur Op.61*

C. ドビュッシー：前奏曲集 より  
*C. Debussy : Préludes*

沈める寺 *La cathédrale engloutie*

花火 *Feux d'artifice*

S. ラフマニノフ：ソナタ第2番 変ロ短調 Op.36 (1931年版)

*S. Rachmaninov : Sonata No.2 b-moll Op.36 (1931version)*

1. *Allegro agitato*

2. *Non allegro ~ Lento*

3. *L'istesso tempo ~ Allegro molto*

### ブラームス：創作主題による変奏曲 ニ長調 Op.21-1

ヨハネス・ブラームス（1833 - 97）は若い時からピアノの名手として活動しただけに、初期にはピアノのための作品を多く書いており、彼が世に知られるようになったのも、ロベルト・シューマンが彼のピアノ曲を高く評価し、世に紹介したのがきっかけだった。それからほどなくシューマンが自殺未遂を図り、その衝撃の中で「シューマンの主題による変奏曲」を1854年に書いたブラームスは、1856年のシューマンの死を挟んで、1857年に自身の主題によるこのニ長調の変奏曲を作り上げる。前作の変奏曲から3年経つ間に彼は変奏書法を真剣に考究した。親友の名ヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ヨアヒム宛の手紙でブラームスは、変奏は主題と厳格な関係にあるべきで、旋律に頼ってはよくないことを述べて、旋律と和声とリズムを変化させることで主題に深く入り込んだベートーヴェンの手法をめざすことを示唆している。「シューマンの主題による変奏曲」にみられる自由なロマン的変奏とは違った、ベートーヴェン風の厳格な性格変奏を志そうというわけで、この「創作主題による変奏曲」にはそうした彼の意図がはっきりと現れている。主題の旋律よりも、主題の和声やバス声部の動きを重んじつつ、11の変奏ごとに新たな性格を作り出しており、地味ながらも味わい深い作品となっている。

### ショパン：即興曲第3番 変ト長調 Op.51

ロマン主義の時代といわれる19世紀においては、自由な小形式のうちに情感や気分をロマン的に表現するいわゆる性格的小品（キャラクター・ピース）が多数書かれた。そうした曲種のひとつとして即興曲があげられる。ショパンは即興曲を4曲残しているが、いずれもその名にふさわしく自由な感興を歌い上げた作品で、いかにもロマン派らしい作風を示している。もっとも、その構成は論理的に考えられており、またショパンらしい創意工夫が随所に窺われ、彼の天才性をいかんなく発揮した佳品となっている。

本日取り上げられる第3番変ト長調は1842年に書かれた曲で、後期の円熟した書法から生み出されるニュアンスの豊かさと優雅な美しさが際立った曲である。3部形式をとり、繊細な動きによる主題を中心とした表情に富んだ主部は、デリケートな和声の綾が美しい。中間部は変ホ短調に転じて、低音に力強い主題が歌われる。主部の再現は短縮された形をとっている。

### ショパン：幻想ポロネーズ 変イ長調 Op.61

ショパンの音楽は祖国ポーランドの民族精神と深く結び付いている。彼の手掛けたピアノ曲のジャンルの中でも、ポーランドの民俗舞曲を彼らしい感性で様式化したポロネーズとマズルカは、ショパンの民族性がとりわけ直接的に現れた曲種といつてよい。本日の「幻想ポロネーズ」は、晩年の1845年の作品だけあって、彼のポロネーズ中でも最も芸術的な様式化の進んだものとなっており、作曲家自身「幻想ポロネーズ」と題していることにも窺い知れるように、ポロネーズのリズムを用いた幻想曲といった趣が強い。形式的にも3部形式を土台とするそれまでのポロネーズとは異なり、いくつかの楽想を発展させながらドラマティックな起伏を作り出すといった、自由で独創的な形式をとっている。当時のショパンは、それまで彼の心の支えとなっていた恋人の女性作家ジョルジュ・サンドとの破局や健康への不安を抱えていたが、そうした苦悩が滲み出ているような、激しい情熱性に満ちた傑作といえるだろう。

### ドビュッシー：前奏曲集 第1集より「沈める寺」；第2集より「花火」

近代フランスの作曲家クロード・ドビュッシー（1862 - 1918）は当時のフランスの象徴主義文学や印象主義絵画の運動に連動するかのよう、ある事象のイメージを浮かび上がらせるような音楽を追求し、

そのため伝統的な法則に捉われない和声やリズムや旋律によって新しい響きの世界を生み出した。2集各12曲の『前奏曲集』はそうしたドビュッシー独自の音楽世界を示す円熟期のピアノ曲で、題の付いた各曲は斬新な響きの中にそれぞれのイメージを浮かび上がらせている。

注目されるのはドビュッシーが出版にあたって、各曲の題を各曲の楽譜の冒頭にはなく曲の終わりに掲げていることだろう。つまり（あくまで楽譜上のことではあるが）曲題はその曲が終わったところで初めて（しかもカッコ付きで）示される形になっているのだ。前代未聞といってよいこうした曲題の提示の仕方は、出版当時様々な議論を巻き起こすことになったが、おそらくドビュッシーはそのような形にすることで、初めに題によってイメージを規定するのではなく、音の表現が標題的なイメージを次第に結んでいくという“象徴主義的な”音楽のあり方を意図していたのではないだろうか。いずれにせよ、それまでに彼が追求してきた象徴主義的な音楽語法のあり方が、この2集の『前奏曲集』には理想的な形で結実しているといえる。第1巻は1909 - 10年、第2巻は1910 - 13年に作曲されており、本日は以下の2曲が演奏される。

「沈める寺」（第1巻第10曲）は不信心ゆえに海に沈んだ大聖堂が海上に浮かび上がるというケルト族の伝説による曲で、神秘的な4度・5度の和音の連なりから3和音による大聖堂の出現へと高揚、聖歌も響くが、やがて再び沈んでいく。

「花火」（第2巻第12曲）は7月14日の革命記念日の情景。すばやい音の動きのうちに大胆な響きとピアノの名技性とは結び付いた曲で、“遠く lointain”の賑わいに始まり、夜空に炸裂する花火を投影しながら、最後は“ラ・マルセイエーズ”の一節を示唆して終わる。

## ラフマニノフ：ソナタ第2番 変ロ短調 Op.36（1931年版）

ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ（1873 - 1943）は自らも大ピアニストであっただけに、彼の数多くのピアノ曲はロシア風のロマン的叙情とヴィルトゥオーゾ的な技巧性とは結び付いたものとなっている。作曲家としてすでに円熟期に入っていた1913年の所産であるピアノ・ソナタ第2番も、そうした彼の個性がとりわけよく示されている作品で、ロシア的な暗い情感、起伏の激しい感情性、ロマンティックな甘美さが、ピアニスティックな書法のうちに打ち出された名作である。

しかしラフマニノフは後年、このソナタがあまりに長大で複雑すぎると感じるようになり、亡命後の1931年に作品の大幅な改訂を行なった。この1931年の改訂版は、原曲の名技的なパッセージなどをかなり思い切って削減するとともに、錯綜したテクスチュアを簡素化して、全体がより明快なものとなっている。濃密な音の綾を持つ初版と、より整理された明快な改訂版とのどちらをとるかは、演奏者の判断と好み次第であり、どちらの版もよく演奏されている（ピアニストの中には初版と改訂版とを折衷して演奏する人もおり、特に作曲者自身のお墨付きを得たホロヴィッツ版はよく知られている）。本日は1931年の改訂版での演奏である。

第1楽章（アレグロ・アジタート）はソナタ形式、感情を叩きつけるような第1主題に始まり、起伏の激しいドラマティックな展開が繰り返されていく。第2楽章（ノン・アレグロ〜レント）はホ短調、いかにもラフマニノフらしい甘美な叙情溢れる3部形式の緩徐楽章である。そのまま休みなく続けられる第3楽章（リステツ・テンポ〜アレグロ・モルト）は変ロ長調で、感情をぶつけるような第1主題を中心にラプソディックな発展を示していく変化に満ちたフィナーレ。最後は鮮やかなコーダで圧倒的に締めくくられる。

（てらにしもとゆき・音楽評論家）